

以前私は自宅の近所の植木屋で、アルバイトをしていたことがある。短期での仕事だったので、任されたのは落ちた枝や葉を片付ける、誰でもできるような仕事だった。職人の手際はスピーディで、1本の木から、次々に枝や葉が落ちてくる。それらは地面へと落とし、それまでの光合成に即した合理的な形態から解放され、自由な配置をつくりだしていた。

大崎土夢の絵について考えていると、刈られた植物が散らかったあの地面をなぜか思い出した。もちろんそのイメージの並置によって多次元化する様相を他の作家と比較しながら語ったり、記憶の受け皿としての絵画について説明するために、精神分析理論を援用することだってできるだろう。それはそれで実りのある結果をもたらすことは分かっているのだが、植物を整えていく植木屋が落とす枝葉は、計画性と偶然が共存する大崎の絵画とどこか通じ合っているような気がする。

植物の種類や職人によってやり方に違いは出てくるようだが、聞くところによると枝の向きなどによって切り方にバリエーションがあり、それを瞬時に判断しながら職人は木を剪定しているようだ。それもあってか剪定は大きい枝を切ってそれから細かく整えるというような単純な仕事ではなく、作業が進んでから比較的大きい枝が切られることもある。それが結果的に、落ちた枝葉に表情を与えるのだ。

枝同士の重なり、風向きによって変化する葉の体積の仕方。植物たちによる様々なパターンは、もとをたどると1本の木から生まれているということも、大崎の絵に似ている。なぜならそのイメージは、大崎というひとりの人間のなかに生い茂る、記憶や経験から刈り取られたものの現れであるからである。刈り散らかされた枝葉から元の状態を想像するのが難しいように、彼の絵も、そもそもの着想を遡及するのは容易なことではない。

植木屋が切った枝を地面に放擲するそのしぐさは、大崎の制作の重要なキーワードでもある、平面にイメージを「散布」する身振りを連想させる。大崎は職人が半ば無意識に枝葉を地面に落としていくかのように、平面に森羅万象を散りばめ、散布図を次々に生み出していくのだ。

塚田優（評論家）

## 展覧会イベント

## クロージングアーティストトーク

大崎土夢（おおさき・とむ）

×

小左誠一郎（おさ・せいichろう）

 2024.2.3（土）  
13:30-15:00

定員 20 名 予約制 参加費 500 円

会場：AIR motomoto ギャラリースペース

&lt;申し込み方法&gt;

 メール件名を「大崎土夢トーク参加希望」とし  
本文に以下を明記の上

 kumamotomotomoto@gmail.com  
までお送りください。

 ①参加者氏名 ②参加人数 ③代表申込者電話番号  
※当日予約無しでも受入可能な席があれば参加可能


## 大崎土夢（ペインター）

OSAKI Tomu

1984年福岡県生まれ、東京都在住。

主な展覧会に「サテライト△サテライト」（HOTEL ANTEROOM KYOTO、京都、2022）、「ブ（プ）ラ（ネ）ズ（グ、フ、ウ）マ（ー）ANB Open Studio vol.7」（ANB TOKYO、東京、2022）、「エリプスの匂い」同時期滞在日本 AIR プログラム成果展（salon cojica/KINBI nicojica、北海道、2021）、「雨足に沿って 舵をとる」（アキハタ マビ 21、東京、2020）、「TWS-Emerging 2015 さいしんみどうとさんしん」（トーキョーワンダーサイト渋谷、東京、2015）など。



## 小左誠一郎（画家）

OSA Seiichiro

1985年静岡県生まれ。

絵画の根源的ななにかを生け捕りにすること、その不思議さに真っ向から対峙する。近年は描くことよりも塗ることによって、世界に新たな厚み（陰影）を与え続けている。これまでの主な展覧会に「花に水」（CAPSULE、東京、2023）、「都美セレクトジョン|絵の社」（東京都美術館、東京、2023）、「百合園」（Yutaka kikutake Gallery、東京、2023）などがある。